

# 韓国語の副詞的成分이따가 [ittaga] と나중에 [nazunge] の意味分析 - 日本語の「あとで」/「のちほど」との対照の観点から -

李 澤 熊

キーワード：時間関係の副詞的成分、類義語分析、日韓対照、対応関係

## 1. はじめに

本稿の目的は、類義関係にある韓国語の副詞的成分이따가 [ittaga] と 나중에 [nazunge] について、日本語の「あとで」/「のちほど」との対応関係を指摘しながら、相互の意味の類似点・相違点を明らかにすることである。

이따가 [ittaga] と 나중에 [nazunge] は以下の例からも分かるように、「問題となる行為を発話の時点において行わず、時間を置いて行う」という共通の意味特徴を持っていると考えられる。

- (1) “제 전화 번호는 이따가 (나중에) 가실 때 적어 드릴게요.” (KAIST:3620)  
(私の電話番号はあとで (のちほど) お帰りになる際にお教えます)
- (2) “무슨 청입니까?” “나중에 (이따가) 말씀 드릴게요.” (KAIST:3616)  
(「何のお願いですか」あとで (のちほど) お話します)

例えば、例(1)は「電話番号を教える」という行為を発話の時点において行うのではなく、帰る際に教えるというように「時間を置いて行う」ととらえられる。また、例(2)の場合も「相手の質問に対してその場で答えるのではなく、時間を置いて答える」というように解釈することができる。

ところで、上記の例における이따가 [ittaga] と 나중에 [nazunge] を日本語に訳すと、「あとで」または「のちほど」に解釈される。実際、韓日辞典を調べてみても、이따가 [ittaga] と 나중에 [nazunge] は「あとで」または「のちほど」に対応すると記述されている。

このことから、「あとで」と「のちほど」も「問題となる行為を発話の時点において行わず、時間を置いて行う」ことを表す場合に用いられると考えられる。

しかし、下の例(3)から分かるように、이따가 [ittaga]/ 나중에 [nazunge] と「あとで」/「のちほど」の対応関係は必ずしも明確ではない。つまり、文脈によっては「あとで」または「のちほど」に置き換えられない場合もあるということである(注1)。

- (3) a “엄마는 이따가 먹을테니까, 철수 먼저 먹어.” (作例)  
(ママはあとで(??のちほど)食べるから、哲秀ちゃん先に食べて)
- b “결혼할 사람과만 연애를 한다면 재미가 없어서 나중에 후회할 것 같아요.”  
(KAIST:3708)  
(結婚する人とだけ恋愛をすると、つまらなくて、あとで(\*のちほど)後悔しそうです)
- c “오늘은 웬일이십니까? 항상 제일 먼저 오시던 선배님이 나중에 오시다니.”  
(例(10)を一部修正)  
(今日はどうなさったんですか。いつも一番先にいらっしゃる先輩が??あと  
で(\*のちほど)いらっしゃるとは)

そこで、本稿では「あとで」と「のちほど」について類義語分析を行い、이따가 [ittaga]/나중에 [nazunge]と「あとで」/「のちほど」の対応関係についても考察する。

ここで、本稿の構成について簡単に述べておく。

まず、2.では이따가 [ittaga]と나중에 [nazunge]の類似点・相違点を明らかにする。

次に、3.では「あとで」と「のちほど」について、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。

続いて、4.では意味分析の結果に基づき、이따가 [ittaga]/나중에 [nazunge]と「あとで」/「のちほど」がどのような対応関係にあるかを明らかにする。

最後の5.は本稿のまとめである。

## 2. 이따가 [ittaga] と 나중에 [nazunge] の意味分析

本節では、類義関係にある이따가 [ittaga]と나중에 [nazunge]を取り上げ、両語の意味の類似点・相違点を明らかにする。

まず、次の例を見てみよう。

- (4) “어떻습니까? 해보시겠습니까?” “그, 그 이야기는 이따가 (나중에) 공연이 끝난 뒤에 다시 하십시오.” (KAIST:2629)

(「どうですか。やってみますか」「そ、その話は이따가 (나중에)公演が終わったら、また話しましょう」)

- (5) “어떻게 끌어냈냐?” “시간 없다. 나중에 (이따가) 말할게.” (KAIST:3619)

(「どうやって引きずり出したの?」「時間がない。나중에 (이따가)話す」)

以上の例は이따가 [ittaga]と나중에 [nazunge]をそれぞれ置き換えられ、また文の持

つ意味もほとんど変わらない。

ここで、両語の類似点について再度確認すると、이따가 [ittaga] と 나중에 [nazunge] はともに「問題となる行為を発話の時点において行わず、時間を置いて行う」ことを表すととらえることができる。例えば、例 (4) は「現在問題となっているその話を、その場(発話の時点)ではなく、時間を置いて(公演が終わったら)する」ということになる。また、例 (5) の場合も「相手の質問に対して、その場(発話の時点)で答えるのではなく、時間を置いて答える」というように解釈することができる。

しかし、以下の例 (6) ~ (9) は 나중에 [nazunge] を 이따가 [ittaga] で言い換えてみると、この文脈では、不可能かやや不自然な文になる。このことから、両語は違う意味の側面も持っていると考えられる。

(6) 대학에 들어가서 큰아들은 예쁘고 유능한 학급 여자 친구와 어울렸다. 그런데 나중에 ( \* 이따가 ) 그녀는 그에게서 떠나버렸다. (KAIST:3619)

(大学に入って長男は同じクラスの可愛くて、頭の良い女の子と付き合った。ところが、나중에 ( \* 이따가 ) 彼女は彼から離れてしまった)

(7) 병모에게 마지막으로 물었다.

“아닙니다.” 병모는 고개를 천천히 흔들었다.

“잘 가게 병모. 나중에 ( \* 이따가 ) 만나거든 술이나 한잔 같이 하세요.” (KAIST:3631)

(ビヨンモに最後に聞いた。「違います」ビヨンモは首をゆっくりと振った。

「さようなら、ビヨンモ. 나중에 ( \* 이따가 ) 会ったらお酒でも一杯やろう!」)

(8) 나는 아들이고 딸이고 차별없이 키운다. 재산도 나중에 ( \* 이따가 ) 똑같이 나눠주고 싶다. (KAIST:2458)

(私は息子と娘を差別しないで育てる。財産も 나중에 ( \* 이따가 ) 平等に分けてやりたい)

(9) 그늘에서 말리고 세제성분이 다빠지지 않더라도 나중에 ( \* 이따가 ) 자연히 공기중으로 빠져나가 인체에 해가 없다. (KAIST:188)

(日陰で干して洗剤成分が全部抜けなくても 나중에 ( \* 이따가 ) 自然に空気中に抜けていくので人体には害がない)

まず、以上の例は2つの事柄(時点)が関係していることが分かる。例えば、例 (6) は「長男が女の子と付き合い」という先行の事柄と「その女の子が長男から離れる」という後続の事柄が想定できる。例 (7) の場合は「現在の状況(話題の時点)」と「二人が会ってお酒を飲む」という事柄が関係しているにとらえられる。

また、問題となる2つの事柄、つまり先行の事柄と後続の事柄の間には直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられ、さらに先行の事柄から後続の事柄が生起するまでは時間の隔たりがあると考えられる。例えば、例(8)は「息子と娘を差別しないで育てる」という先行の事柄と「財産を平等に分けてやる」という後続の事柄は独立した事柄として位置づけられ、さらに「後続の事柄は先行の事柄から時間を置いて生起する」というようにとらえられる。また、例(9)は「日陰で干した状態(話題の時点)」と「洗剤成分が空気中に抜けていく」はそれぞれ独立した事柄として位置づけられ、「先行の事柄から後続の事柄が生起するまでは時間の隔たりがある」というようにとらえられる(洗剤成分は日陰で干しても、時間が経つと、自然に空気中に抜けていく)。

以上のことから、나중에 [nazunge] の意味 (<別義1>) は<問題となる事柄(行為や出来事、現象など)が><現在または話題の時点から時間を置いて生起する>ことを表すと記述することができる。

ところが、나중에 [nazunge] は今記述した意味と異なる意味で用いられることがある。例えば、次のような例の場合である。

- (10) “오늘은 웬일이냐? 항상 제일 먼저 오던 네가 나중에 오다니.” (KAIST:238)  
(今日はどうしたの。いつも一番先に来るお前が 나중에 来るとは)
- (11) (낙하실험) 가벼운 물체는 무거운 물체보다 나중에 떨어진다. (作例)  
(落下実験) 軽い物体は重い物体より 나중에 落ちる)
- (12) 무엇을 먼저 하고 무엇을 나중에 해야 할지, 집안 정돈은 어떻게 해야 좋을지, 식단은 어떻게 짜야 할지. (KAIST:3689)  
(何を先にやって何を 나중에やるべきか、家の整理整頓はどうすればいいか、献立はどう立てればいいか)

以上の例は、나중에 [nazunge] の<別義1>と違って「事柄の順序(順番)」が問題となっている。例えば、例(10)は「お前が来る」という事柄が単に「時間を置いて生起する」ということを意味するのではなく、「他の人に比べて来る順番がうしろに位置する」ということを表している。また、例(11)の場合も「時間の問題」ではなく「重い物体より地面に落下する順序(順番)が遅い」という「順序(順番)」が問題となっている。

以上のことから、나중에 [nazunge] のもう一つの意味 (<別義2>) は<問題となる事柄(行為や出来事、現象など)が><基準となる事柄より><順序・順番の上でうしろに位置する>ことを表すと記述することができる。

ここで、＜別義 1＞と＜別義 2＞の関連性について考えてみよう。

ある 2 つの事柄が（同時ではなく）連続的あるいは非連続的に生起する場合、その 2 つの事柄の間には必然的に「時間」と「順序（順番）」の上でずれが生じると考えられる。このように考えると、＜別義 1＞は「時間のずれ」に注目して述べる場合に用いられるととらえられる。それに対して、＜別義 2＞は「順序（順番）のずれ」に注目して述べる場合に用いられると考えられる。

続いて、이따가 [ittaga] を取り上げる。以下の例を見てみよう。

(13) ( 집을 나가기 직전, 여자 친구와의 전화 ) “어제는 졸린 얼굴이었는데 .. 오늘은 어떤 얼굴일까? 사랑해, 이따가 (?? 나중에) 봐.” ( 作例 )

(( 家を出る直前、彼女との電話 ) 昨日は眠たそうな顔してたんだけど…今日はどうか? 愛しているよ. 이따가 (?? 나중에) 会おう )

(14) “내일 선숙이누나 결혼식이라, 오늘 이따가 시골에 내려간다!”

(<http://orir.net/space/>)

( 明日は善淑姉さんの結婚式なので、今日 이따가 田舎に帰る! )

(15) ( 아침 등교 전 ) “지금 학교에 가기는 조금 이르니, 이따가 (?? 나중에) 가자.”

( 作例 )

(( 朝、登校前 ) 今学校へ行くには少し早いから、이따가 (?? 나중에) 行こう )

(16) ( 공익단체의 업무실태고발 ) 기자가 현장을 지켜 본 결과 일부 몇몇 사업장 근로자를 제외하고는 출근 후 짧게는 30 분에서 1 시간 정도만 일을 한 후 퇴근하는 사람이 많았다. 한 근로자에게 “L 모씨 출근했습니까?” 라고 물었더니 “이따가 (?? 나중에) 출근할 겁니다” 고 해명했다. 그러나 오후가 돼도 결국 출근하지 않았다. ([http://www.domin.co.kr/html/view\\_article.php?q\\_iiid=320439&sec\\_id=4](http://www.domin.co.kr/html/view_article.php?q_iiid=320439&sec_id=4))

(( 公益団体の業務実態の告発 ) 記者が現場を観察した結果、一部の事業場の勤労者をのぞけば、出勤後短くは 30 分から 1 時間ほどで帰宅する人が多かった。ある勤労者に「L さん出勤しましたか?」と聞くと、「이따가 (?? 나중에) 出勤します」とごまかす。しかし、午後になっても結局出勤して来なかった)

以上の例から分かるように、이따가 [ittaga] は「主体の行為を表す」場合に用いられると考えられる。そしてその行為は、主体の置かれた一連の状況の中（のある時点）で行われるものとしてとらえられる。例えば、例 (13) の場合「実際彼女に会う」という行為は「家を出る直前の彼女との電話」という状況から独立したのではなく、「連続した一連の状況の中で行われるもの」としてとらえられている。また、例 (14) の場

合も「田舎に帰る」という行為は「今日」という現在主体が置かれている状況の中のある時点で行われるものとして考えられる。

また、例(15)(16)から分かるように、問題となる行為は発話の時点からあまり時間が経過していない時期に行われるものとしてとらえられる。例えば、例(15)は「今学校へ行くには少し早い」という発話から時間を置いて「行く」ということを表しているが、その行為を実現するまでの時間は比較的短いものとしてとらえられている。また、例(16)の場合も「公益団体の業務実態の告発」という状況から考えると、「Lさんが出勤したか」という質問を受けた時点から、実際Lさんが出勤するという行為が実現するまでの時間は比較的短いものとして考えることができる。なお、「行為の実現までの時間が比較的短い」というのは、客観的・絶対的なものではなく、主体による主観的・相対的なものであると考えられる。例えば、例(14)の場合は、主体にとって短いものとしてとらえられれば、だいぶ時間が経った時点で帰っても問題ない（今日中に帰ればいい）と考えられる。それに対して、例(15)の場合は、文の状況から、行為の実現までの時間は30分から長くても1時間程度というようにしかとらえられない。このように、客観的に比べてかなりの差があっても、主体にとって比較的短いものとしてとらえられれば、이따가 [ittaga] が問題なく用いられるということになる。

以上のことから、이따가 [ittaga] の意味は<主体が><問題となる行為を><発話(話題)の時点から比較的短い時間を置いて><行う>ことを表すと記述することができる。

それでは、ここで나중에 [nazunge] と이따가 [ittaga] の相違点について検討する(注2)。結論を先取りすると、両語の違いは次のようにまとめられる。

·나중에 [nazunge] の場合は2つの事柄（行為や出来事、現象など）が関係しており、両者（先行の事柄と後続の事柄）の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる。また、先行の事柄から時間を置いて後続の事柄が生起する（時間の長さについては中立）。

それに対して、이따가 [ittaga] は「主体の行為を表す」場合にのみ用いられる。そしてその行為は、主体の置かれた一連の状況の中（のある時点）で行われるものとしてとらえられる。さらに、問題となる行為は発話（話題）の時点から比較的短い時間を置いて行われる。

·나중에 [nazunge] はある任意の時点を基準としてそれより相対的に未来の時点で生起する事柄について表す場合があるが、이따가 [ittaga] はそのような使い方はできない。

以上のことを例文に基づいて説明してみよう。

まず、上の例 (6) ~ (8) における 나중에 [nazunge] は 이따가 [ittaga] で言い換えることができない。それは、文の状況から分かるように「先行の事柄と後続の事柄の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられており、後続の事柄が生起するまで、ある程度時間を要する」と考えられるからである。

例えば、例 (6) は「長男が女の子と付き合う」という事柄と「その女の子が長男から離れる」という後続の事柄は独立した事柄として位置づけられており、「その女の子が長男から離れる」という事柄の生起には、先行の事柄からある程度（場合によっては相当な）時間を要する」と考えられる。この場合、이따가 [ittaga] が用いられないのは、問題となる行為を、主体の置かれた一連の状況の中（のある時点）で行うものとしてとらえられないからである。また、後続の事柄が生起するまでの時間を比較的短いとしてもとらえられないからである。

また、例 (7) も「二人が会ってお酒を飲む」という事柄は独立したものとして位置づけられており、文脈からも分かるように「二人が会ってお酒を飲む」という事柄は「現在の状況（話題の時点）」から（例えば、何週間後など）時間的にある程度離れて生起するものとしてとらえられる。従って、「問題となる行為が、主体の置かれた一連の状況の中（のある時点）で行われるものとしてとらえられ、さらに発話の時点からあまり時間が経過していない時期に行われる」ことを表す 이따가 [ittaga] はこのような文には用いられない。

次に、例 (9) についても 나중에 [nazunge] を 이따가 [ittaga] で言い換えることができない。それは、나중에 [nazunge] は人間の行為や出来事、現象などについても用いられるのに対して、이따가 [ittaga] は「人間の行為を表す」場合にしか用いられないからである。

さらに、次の例のように、나중에 [nazunge] はある任意の時点を基準としてそれより相対的に未来の時点で生起する事柄について表す場合があるが、이따가 [ittaga] はこのような使い方はできない。

- (17) 피타고라스 학파에 대해 연구하던 타렌툼 출신의 아리스토크세노스는 나중에 ( \* 이따가 ) 아리스토텔레스의 제가가 된 사람인데 ... (KAIST:2088)  
(ピタゴラス学派について研究していたタレントゥム出身のアリストクセノスは 나중에 ( \* 이따가 ) アリストテレスの弟子になった人であるが…)
- (18) 전반적인 농업개혁안의 부재와 정치적 불안으로 인해 실효를 거두지 못했다. 이러한 마데로의 정책 부재는 나중에 ( \* 이따가 ) 그의 노선을 흡수하게 되는 입헌파의 전략과 크게 대비되는 것이었다. (KAIST:2497)

(全般的な農業改革案の不在と政治的な不安によって成果を収めることができなかつた。このようなマデロの政策の不在は나중에 (\*의따가) 彼の路線を吸収することになる立憲派の戦略と大きく異なるものであつた)

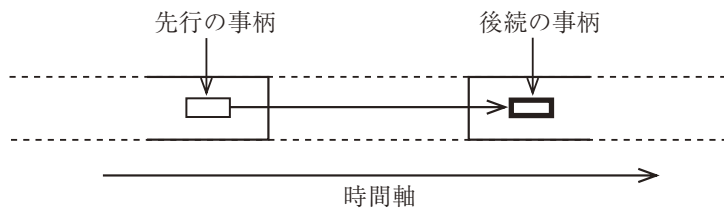
一方、例(13)と(15)における의따가 [ittaga] を나중에 [nazunge] に置き換えてみるとこの文脈では不自然な文になる。それは、나중에 [nazunge] は「先行の事柄と後続の事柄の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる」場合に用いられるからであると考えられる。

例えば、例(13)は上でも説明したように「家を出る直前の彼女との電話」と「実際彼女に会う」という行為は独立したものではなく、「連続した一連の状況の中で行われるもの」としてとらえられていると考えられる。この場合、나중에 [nazunge] を用いると不自然な文になるのは、「先行の事柄と後続の事柄の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられている」というようにはとらえられないからである。

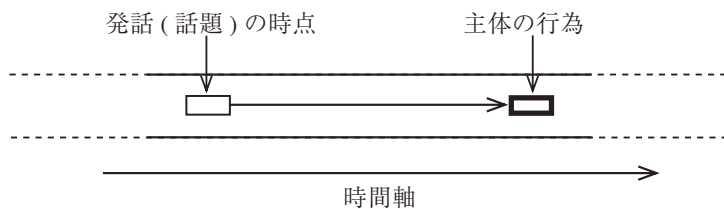
また、例(15)の場合も「今学校へ行くには少し早い」という発話状況と「行く」という行為は独立したものとして存在するのではなく、「連続した一連の状況の中で行われる」行為としてとらえられていると考えられる。この場合、나중에 [nazunge] を用いると不自然な文になるのは、「先行の事柄と後続の事柄の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられている」とは考えにくいからである。

以上のように、나중에 [nazunge] と의따가 [ittaga] の相違点について見てきたが、このことを図で示すと、次のようにまとめられる。

<図 1> 나중에 [nazunge]



<図 2> 의따가 [ittaga]





나중에 [nazunge] の場合は、問題となる事柄（行為や出来事、現象など）が先行の事柄と直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる。また、先行の事柄から時間を置いて後続の事柄が生起することを表すが、時間の長さについては中立的である。

それに対して、이따가 [ittaga] の場合は、問題となる行為が、主体の置かれた一連の状況の中（のある時点）で行われるものとしてとらえられる。また、その行為は発話（話題）の時点から比較的短い時間を置いて行われる。

ここで、나중에 [nazunge] と 이따가 [ittaga] が両方用いられる例を見てみよう。

(19) “그럼, 하룻밤 묵어도 상관없겠습니까?” “여부가 있습니까. 나중에 (이따가) 어르신네께서 돌아오시면 스님을 정성껏 대접하였다 하오면 몹시 대견해 하실 것입니다.” (KAIST:2324)

(「それでは、一晩泊まっても構いませんか?」「勿論です。나중에 (이따가) 主人が帰ったら、和尚様を懇ろにおもてなしたと言うと、きっと喜んでくれると思います」)

(20) “저같이 무능력한 사람도 깨달을 수 있나요?” “그럼요. 이따가 (나중에) 기원정사로 와서 내 설법을 들으시오. 내가 가르쳐 드리리다.” (KAIST:2192)

(「私のような無能力な人間も悟ることができるのでしょうか?」「勿論です。이따가 (나중에) 起園静寺へ来て私の説法をお聞きください。私がお教えます」)

以上の例における「主人が帰る」、「起園静寺へ来る」という行為は、その場（発話の時点）で行われるのではなく、時間を置いて行われるものとしてとらえられる。

ただし、나중에 [nazunge] を使った場合は、問題となる事柄が先行の事柄と直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる。そのため、例 (19) の場合の「主人が帰る」という行為はその日のうちに行われなくても問題ないと考えられる。

それに対して、이따가 [ittaga] を使った場合は、問題となる行為が、主体の置かれた一連の状況の中（のある時点）で行われるものとしてとらえられ、またその行為は発話（話題）の時点から比較的短い時間を置いて行われるものとしてとらえられる。従って、例 (19) の場合、「主人が帰る」という行為は比較的短い時間のうちに（その日のうちに）行われるというニュアンスが読み取れる。

### 3. 「あとで」と「のちほど」の意味分析

続いて本節では、「あとで」と「のちほど」を取り上げ、相互の意味の類似点・相違

点を明らかにする。先行研究としては、飛田・浅田(1994)、森田(1989)などの辞典類があげられる。それぞれの記述には参考すべき点も多いが、いずれも各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点の記述が十分とは言えない。以下、比較的詳しく分析がなされていると思われる飛田・浅田(1994)を取り上げる。

あとで：問題の時間から近い未来に物事が起こる様子を表す。あらたまった場面では「のちほど」を用いる。(飛田・浅田(1994:12))

のちほど：近い将来に物事が起こる様子を表す。丁寧なニュアンスがあり、公式の発言や目上に対する発言などによく用いられる。くだけた日常会話では「あとで」を用いる。ただし、「あとで」は過去の時点よりも相対的に未来の時点での出来事をも表せる。(飛田・浅田(1994:433-434))

先行研究の記述に従うと、「あとで」と「のちほど」の違いは、いわゆる「文体差」と「過去の時点よりも相対的に未来の時点での出来事を表せるか否か」にあると言える。しかし、次の例は今の記述では説明が難しいと考えられる。つまり、単なる「文体差」だけでは説明ができない場合があるということである。

(21) 火のついた灰が布団に落ちると、すぐ燃え上がらなくても、後で(\*のちほど) 火事になることがあります。(www.sumitate.co.jp/fureai/tokushu/028/index.html)

(22) ただ、私が何故(なにゆえ)妻のヒステリイを力説するか、それはこの奇怪な現象に対する私自身の説明と、ある関係があるからで、その説明については、いずれ後で(\*のちほど) 詳しく申上る事に致しましょう。

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/165\_15240.html)

そこで本稿では、以上を踏まえて、「あとで」と「のちほど」の類似点・相違点についてさらに詳しく考察する。

次の例を見てみよう。

(23) それから高レベル放射線廃棄物の低減のためということは、これはプルスーマルとは直接関係のない話です。資源の有効利用の問題に関しては後で(のちほど) 申し上げますが、プルトニウムをプルスーマルでやるやり方は、基本的にはこの画面のような方針で行われようとしています。

(http://etelmtsv.pref.ehime.jp/info/HOUDOU/touronkai/t\_04.html)

(24) 個々の症状にあわせてどの温泉地を選べばいいのかや、温泉の泉質、そして上

手な温泉の入り方については、後ほど(あとで) 詳しく述べることにしましょう。  
(<http://www.yomiuri.co.jp/tabidomestic/zatsugaku/za041002.htm>)

ここで、両語の類似点について再度確認すると、「あとで」と「のちほど」はともに「問題となる行為を発話の時点において行わず、時間を置いて行う」ことを表すとらえることができる。例えば、例(24)は「現在問題となっている温泉の入り方を、その場(発話の時点)ではなく、時間を置いて述べる」ということになる。

しかし、以下の例(25)～(27)は「あとで」と「のちほど」で言い換えることができない。このことから、両語は違う意味の側面も持っていると考えられる。

- (25) 信夫は自分の手の中にはいってしまいそうなふじ子の手をみた。その手を強く握りしめたいような思いに耐えながら、  
「ふじ子さん、また後で(\*のちほど) 来ます。ほくはこれからずっと札幌にいるのですから、今度は押し花ではなく、いろいろな花を持って来てあげますよ」  
(三浦綾子『塩狩峠』:427)
- (26) ただ、私が何故(なにゆえ)妻のヒステリイを力説するか、それはこの奇怪な現象に対する私自身の説明と、ある関係があるからで、その説明については、いづれ後で(\*のちほど) 詳しく申上る事に致しましょう。(例(22)の再掲)
- (27) 「いま、食べたくないわ」  
「あら、どうして? ……お父様が待っていらっしゃるわ」  
「あとで(\*のちほど) 食べるわ」  
「そんなこと言わないで、いらっしゃいよ。一緒にたべた方がおいしいわ」(石川達三『青春の蹉跎』:62)

まず、以上の例は2つの事柄(時点)が関係していることが分かる。例えば、例(25)は場合は「現在の主体の置かれている状況(話題の時点)」と「(会いに)来る」という事柄が関係しているととらえられる。

また、問題となる2つの事柄、つまり先行の事柄と後続の事柄の間には直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる。そのため、先行の事柄から後続の事柄が生起するまでは時間の隔たりがあると考えられる。例えば、例(26)は「現在の主体の置かれている状況(話題の時点)」という先行の事柄と「その説明をする」という後続の事柄は独立した事柄として位置づけられ、さらに「後続の事柄は先行の事柄から時間を置いて生起する」というようにとらえられる。

なお、「先行の事柄」と「後続の事柄」の間の時間の長さは中立的であると考えられる。

例えば、例(26)の場合は、「いずれ」という表現からも分かるように、何週間、何ヶ月後というように、ある程度時間が経った時点で「その説明をする」という解釈が可能である。それに対して、例(27)の場合は「少なくとも今日のうちに食べる」というように考えられ、「先行の事柄」と「後続の事柄」の間の時間は比較的短いものとしてとらえられる。

以上のことから、「あとで」の意味は<問題となる事柄(行為や出来事、現象など)が><現在または話題の時点から時間を置いて生起する>ことを表すと記述することができる。

次に、「のちほど」を取り上げる。以下の例を見てみよう。

(28) (取引先に向かう直前の電話) 今日は色々とお世話になると思いますが、どうかよろしくお願い致します。それでは、後ほど(??あとで) お伺いいたします。(作例)

(29) (キーの受け取り) 購入画面の必要項目に記入して送信すると、後ほど(??あとで) (5分ほどして) メールが届きます。そのメールでキーが記載してあります。  
([http://www.peter-rabbit.jp/peter/reports/pc/answerphone/4\\_setup/402\\_callsoft\\_setup.htm](http://www.peter-rabbit.jp/peter/reports/pc/answerphone/4_setup/402_callsoft_setup.htm))

以上の例から分かるように、「のちほど」は「主体の行為を表す」場合に用いられると考えられる。そしてその行為は、主体の置かれた一連の状況の中(のある時点)で行われるものとしてとらえられる。例えば、例(28)の場合「実際何う」という行為は「取引先に向かう直前の電話」という状況と独立したものではなく、「連続した一連の状況の中で行われるもの」としてとらえられている。

また、例(29)から分かるように、問題となる行為は発話の時点からあまり時間が経過していない時期に行われるものとしてとらえられる。例(29)は「必要項目に記入して送信する」という状況から時間を置いて「メールが届く」ということを表しているが、文中にも現れているように、その行為を実現するまでの時間は比較的短いものとしてとらえられている。

以上のことから、「のちほど」の意味は<主体が><問題となる行為を><発話(話題)の時点から比較的短い時間を置いて><行う>ことを表すと記述することができる。

それでは、ここで「あとで」「のちほど」の相違点について検討する。

まず、上の例(25)(26)は「あとで」を「のちほど」で言い換えることができない。それは、文の状況から分かるように「先行の事柄と後続の事柄の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられており、さらに後続の事柄が生起するまである程度

の時間を要する」と考えられるからである。

例えば、例(25)は「現在の主体の置かれている状況(話題の時点)」と「(会いに)来る」という事柄は、独立した事柄として位置づけられており、「(会いに)来る」という事柄の生起には、先行の事柄からある程度(場合によっては相当な)時間を要する」と考えられる。この場合、「のちほど」が用いられないのは、「問題となる行為を、主体が置かれた一連の状況の中(のある時点)で行うもの」としてとらえられないからである。また、後続の事柄が生起するまでの時間を比較的短いとしてもとらえられないからである。

一方、例(28)(29)における「のちほど」を「あとで」に置き換えてみると、この文脈では不自然な文になる。それは、「のちほど」の場合の主体の行為は、主体の置かれた一連の状況の中(のある時点)で行われるものとしてとらえられるからである。

例えば、例(28)は上でも説明したように「実際何う」という行為は「取引先に向かう直前の電話」という状況と独立したものではなく、「連続した一連の状況の中で行われるもの」としてとらえられていると考えられる。この場合、「あとで」を用いると不自然な文になるのは、「先行の事柄と後続の事柄の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられている」というようにはとらえにくいからである。

なお、下の例(30)からも分かるように、「のちほど」は「人間の行為を表す」場合にしか用いられないのに対して、「あとで」は行為の他に、出来事や現象などについても用いられる。

(30) 我々は慎重に林に入って行った。

「いいか、まず彼奴に手榴弾を使わしちまわないとまずい。声を出せば、きつと抛って来やがるから、怒鳴って、途端に逃げるんだぞ。いいか」彼は林の奥へ叫んだ。「おーい、安田。獲って来たぞ」

そして踵を返して急に駆け下りた。後で( \* のちほど)炸裂音が起った。(大岡昇平『野火』:304)

続いて、次の例を見てみよう。

(31) 私は夏目先生を訪ふたことがあつたが、その時樗蔭氏にもお目にかかったのである。樗蔭氏は夏目先生より後で( \* のちほど)逝去された。

([http://www.aozora.gr.jp/cards/000286/files/3210\\_7208.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000286/files/3210_7208.html))

(32) 毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコを押しに出かけて行く気立の優しい狂人である。私はこのシンケイによく虱を取ってもらったものだ。彼は後で( \* の

ちほど) 支柱夫に出世したけれど、外に、島根の方から流れて来ている祭文語りの義眼の男や、夫婦者の坑夫が二組、まむし酒を売るテキヤ、親指のない淫売婦、サーカスよりも面白い集団であった。(林美美子『放浪記』:12)

飛田・浅田(1994)も指摘するように、「あとで」はある任意の時点を基準としてそれより相対的に未来の時点で生起する事柄について表す用法があるが、「のちほど」はこのような用法はない。

さらに、次の例を見てみよう。

- (33) そして俺たちのことを『工場』だと思ふ。そして動きは始める。ちゃんと計算してあるんだ」  
「拷問？」と私は言った。「拷問って、どんな拷問？」  
「あとで(\*のちほど)教えるよ、ちゃんと」と小男は言った。(山本有三『路傍の石』:521)
- (34) ルノーは、海外での成長という政策によって、この挑戦に立ち向かいました。これについては後ほど(あとで)詳しく申し上げます。  
(<http://www.nikkei.co.jp/hensei/ngmf2000/text/text05.html>)

上の例(33)は「あとで」を「のちほど」で言い換えることができない。それは、飛田・浅田(1994:12)にも指摘されているように、「のちほど」は改まった場面(公式の発言や目上に対する発言)に用いられるからであると考えられる。それに対して、「あとで」は文体差については中立的である。

それではここで、「あとで」と「のちほど」が両方用いられる例を見てみよう。

- (35) まず最初に、本日の委員の出席状況でございますが、お2人の委員が欠席でございます。お1人の委員が後ほど(あとで)いらっしゃると今連絡が入りました。今のところ20名のうち17名の出席をいただいております。  
(<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/singi1.pdf>)

以上の例における「委員がいらっしゃる」という事柄は、その場(発話の時点)で行われるのではなく、時間を置いて行われるものとしてとらえられる。

ただし、「のちほど」を使った場合は、問題となる行為が、主体の置かれた一連の状況の中(のある時点)で行われるものとしてとらえられ、またその行為は発話(話題)の時点から比較的短い時間を置いて行われるものとしてとらえられる。さらに、改ま

りの度合いが高い文として解釈される。

それに対して、「あとで」を使った場合は、問題となる事柄が先行の事柄と直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる。また、後続の行為が行われるまでの時間の長さは中立的であるため、「のちほど」を用いた場合に比べ、時間の隔たりが大きいというニュアンスが読み取れる。なお、改まりの度合いについては中立的である。

#### 4. *이따가* [ittaga]/ *나중에* [nazunge] と「あとで」/「のちほど」の対応関係について

以上のように、本稿では *이따가* [ittaga]/ *나중에* [nazunge] と「あとで」/「のちほど」を取り上げ、相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。

ここでは、以上の分析結果に基づき、*이따가* [ittaga]/ *나중에* [nazunge] と「あとで」/「のちほど」が、それぞれどのような対応関係にあるかについて考察する。

結論から先取りすると、それぞれの対応関係は、次のようにまとめられる。

<表 1> *이따가* [ittaga]/ *나중에* [nazunge] と「あとで」/「のちほど」の対応関係

	<i>이따가</i>	<i>나중에</i>	あとで	のちほど
2つの事柄を独立した事柄として位置づける	×	○	○	×
当該の行為を一連の状況の中のある時点で位置づける	○	×	×	○
当該の事柄が生起するまでの時間の捉え方	短い	中立	中立	短い
人間の行為を表す文	○	○	○	○
出来事・(自然) 現象を表す文	×	○	○	×
任意の時点を基準としてそれより相対的に未来の時点で生起する事柄を表す文	×	○	○	×
文体差 (改まりの度合い)	中立	中立	中立	○
事柄の順序 (順番)	×	○	×	×

以下の例を見てみよう。

(36) 信夫は自分の手の中にはいってしまいそうなふじ子の手をみた。その手を強く握りしめたいような思いに耐えながら、

「ふじ子さん、また後で (*\*のちほど/나중에/ \*이따가*) 来ます。ほくはこれからずっと札幌にいますので、今度は押し花ではなく、いろいろな花を持って来てあげますよ」(例 (25) の再掲)

(37) (取引先に向かう直前の電話) 今日は色々とお世話になると思いますが、どうかよろしくお願い致します。それでは、後ほど (??あとで/??*나중에/ 이따가*) お伺

いたします。(例(28)の再掲)

- (38) ただ、私が何故(なにゆえ)妻のヒステリイを力説するか、それはこの奇怪な現象に対する私自身の説明と、ある関係があるからで、その説明については、いずれ後で( \*のちほど/나중에 / \*이따가) 詳しく申上る事に致しましょう。(例(22)の再掲)

まず、例(36)のように「後で」と 나중에 [nazunge] の場合、2つの事柄(先行の事柄と後続の事柄)の間は直接的な関連性がなく、独立した事柄として位置づけられる。それに対して、「のちほど」と 이따가 [ittaga] は例(37)のように、問題となる行為が主体の置かれた一連の状況の中(のある時点)で行われるものとしてとらえられる。また、例(38)のように「後で」と 나중에 [nazunge] は先行の事柄から問題となる事柄が生起するまでの時間の長さについては中立的である。それに対して、「のちほど」と 이따가 [ittaga] は、問題となる行為が発話(話題)の時点から比較的短い時間を置いて行われる。さらに、次の例を見てみよう。

- (39) この液体に窒素を入れると、あとで( \*のちほど/나중에 / \*이따가) 煙が発生します。(作例)
- (40) “엄마는 이따가 (나중에) 먹을테니까, 철수 먼저 먹어.” (例(3a)の再掲)  
(ママはあとで(??のちほど) 食べるから、哲秀ちゃん先に食べて)
- (41) 피타고라스 학파에 대해 연구하던 타렌툼 출신의 아리스토크세노스는 나중에( \*이따가) 아리스토텔레스의 제가가 된 사람인데...(例(17)の再掲)  
(ピタゴラス学派について研究していたタレントウム出身のアリストクセノスはあとで( \*のちほど) アリストテレスの弟子になった人であるが…)
- (42) (낙하실험) 가벼운 물체는 무거운 물체보다 나중에 ( \*이따가) 떨어진다.(例(11)の再掲)  
(落下実験)軽い物体は重い物体より ??あとで( \*のちほど)落ちる)

まず、例(39)から分かるように、「のちほど」と 이따가 [ittaga] は「人間の行為を表す」場合にしか用いられないのに対して、「後で」と 나중에 [nazunge] は行為の他に、出来事や現象などについても用いられる。

また、例(40)において「のちほど」が不自然なのは、「のちほど」は改まった場面(公式の発言や目上に対する発言)に用いられるからである。それに対して、「あとで」と 이따가 [ittaga]/ 나중에 [nazunge] は文体差については中立的である。

さらに、例(41)のように「後で」と 나중에 [nazunge] は、ある任意の時点を基準と



してそれより相対的に未来の時点で生起する事柄について表すことができるが、「のちほど」と이따가 [ittaga] はそのような使い方はできない。

最後に、나중에 [nazunge] は「問題となる事柄（行為や出来事、現象など）が基準となる事柄より順序・順番の上でうしろに位置する」ことを表す場合に用いることができるが이따가 [ittaga] と「あとで」/「のちほど」は用いられない。

## 5. まとめ

以上、本稿では、類義関係にある韓国語の副詞的成分이따가 [ittaga] と나중에 [nazunge] について、日本語の「あとで」/「のちほど」との対応関係を指摘しながら、相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。

分析の結果、나중에 [nazunge] は「あとで」に、이따가 [ittaga] は「後ほど」にほぼ対応していることが分かった。ただし、〈表1〉にも示したように、それぞれ異なる意味特徴をも有するため、必ずしもきれいには対応しない。

### 나중에 [nazunge] と「あとで」

#### 共通点

〈問題となる事柄（行為や出来事、現象など）が〉〈現在または話題の時点から時間を置いて生起する〉

#### 相違点（나중에 [nazunge] のみが持つ意味特徴）

〈問題となる事柄（行為や出来事、現象など）が〉〈基準となる事柄より〉〈順序・順番の上でうしろに位置する〉

### 이따가 [ittaga] と「のちほど」

#### 共通点

〈主体が〉〈問題となる行為を〉〈発話（話題）の時点から比較的短い時間を置いて〉〈行う〉

#### 相違点（文体差）

「のちほど」：改まった場面（公式の発言や目上に対する発言）に用いられる。

이따가 [ittaga]：文体差については中立的である。

## 注

注1 本文中の引用例の容認度に用いた「\*」の記号は、その表現が非文であることを表す。「?」はその表現が非文ではないが、容認度が低いことを表し、「??」は「?」よりもさらに容認度が低いことを表す。

注2 이따가 [ittaga] は나중에 [nazunge] が<別義1>として用いられる場合に類義関係にあると考えられるため、以下では<別義1>とのみ比較する。

#### 参考文献

- 朱信源編 (2005) 『標準韓国語辞典』, 白帝社.  
民衆書林編集局編 (1998) 『日韓・韓日辞典』, 民衆書林.  
飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版.  
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店.  
安田吉実・箕輪吉次・孫洛範・李淑子編 (2006) 『韓日辞典』, 民衆書林.

#### 例文出典

- (1) CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』(1995)
- (2) 検索エンジン google(<http://www.google.co.jp/>)
- (3) KAIST Concordance Program(<http://csfive.kaist.ac.kr/kcp/>)
- (4) 検索デスク (<http://www.searchdesk.com/>)